



僻地学究生活

東栄町国民健康保険東栄病院 浜松医科大学皮膚科学講座 神谷 浩二 (愛知県 30 期)

私はプライマリ・ケア医であり、皮膚科医でもある。臨床医であり、研究者でもある。自治医科大学卒業後 7 年目を迎え、先日は日本皮膚科学会東部支部学術大会にシンポジストとしてお招きいただき、未だに余韻の残る素晴らしい学会企画の中でこれまでの僻地学究生活を振り返ることができた。会長であった大槻マミ太郎教授には在学時より大変お世話になり、卒後も医局の垣根を越えて叱咤激励して下さることをとても感謝している。何か大きな実績を残してきたわけではないが、これまでの研究活動を中心に僻地での新たな選択肢や可能性として紹介できれば幸いである。



自治医科大学を卒業し、名古屋第二赤十字病院で 2 年間の初期臨床研修後、岡山県で僻地赴任することとなった。赴任先では、プライマリ・ケア医として幅広い分野での診療を行いながらその地域の様々な事業にも携わり、とてもやりがいを感じる毎日であった。その中で、私は皮膚科学を専攻することを決めており、週 1 日を岡山大学皮膚科学教室で過ごし、皮膚科医としてのキャリアもスタートさせた。プライマリ・ケア医として僻地赴任するなかで、皮膚科学を専攻する自治医科大学卒業生は極めて少ないが、プライマリ・ケアに必要な皮膚科の知識や技能は多い。さらに私は社会人大学院に入学し、同時に研究者としてのキャリアもスタートさせた。皮膚科では、病態が解明されていない疾患や治療に難渋する疾患が多いため、日夜続けられる研究活動に期待を抱き、また可能性を感じた。なぜなら、これまでも不可能を可能にし、**Science Fiction** でさえ現実にしてきた世界である。岡山大学では岩月啓氏教授、青山裕美准教授のご指導のもと、「尋常性天疱瘡の患者血清中に検出されるデスマグレイン(Dsg)3 の Ca^{2+} 非依存性構造に対する抗体とその病因性への関与」をテーマに研究を始めた。天疱瘡は、表皮細胞間接着因子 Dsg に対する自己抗体による自己免疫性水疱症で、重症例は高い抗体値を有する。寛解期でも高い抗体値を有する症例があり、非病理性抗体が存在する。Dsg の Ca^{2+} 依存性立体構造に結合する抗体は病因性が高いが、従来の ELISA は抗体のエピトープや病因性を区別できない。われわれは、Dsg 抗原 ELISA プレートに EDTA 処理することで Ca^{2+} 依存性立体構造を変換し (EDTA-treated ELISA)、様々なエピトープのモノクローナル抗体の結合性を検討した結果、本法が Ca^{2+} 非依存性構造を認識する抗体を検出することを解明した¹⁾。さらに、本法により算出される ELISA 値が従来の ELISA 値と比べてより鋭敏に病勢を反映し、診断治療の指標として簡便かつ有用であることを示した²⁾。様々な制約の中で、結果としてプライマリ・ケア医として僻地赴任していた 3 年間で学位取得に至った。また、現症の捉え方や考え方、自分のしてきた仕事を形として残すことの重要性をよく学び、僻地でプライマリ・ケア医として経験した貴重な症例も論文にまとめることができ、望外の喜びを得られた³⁾⁴⁾。

自分の目標を妨げる最大の制約は、情熱を失い、さらには行動力を失うことである。私は皮膚科医を志した時点でアトピー性皮膚炎の病態にとっても興味があり、いつか病態解明につながる仕事に携わりたいと思っていた。基礎研究では ELISA、western blotting、PCR、flow cytometry、免疫染色、遺伝子解析、マウスを用いた解析など様々な手法を用いるが、ある疾患を対象に検査の有用性や治療の有効性を検討することも重要な研究の 1 つである。どのような研究が行えるかはどのような環境に置かれているかによるが、私の場合は良い環境で指導者に恵まれ、これらの多くを学ぶことができた。そして学位取得は、臨床医、研究者としての視野を広げ、新たな目標への大きな一歩となった。現在は愛知県で僻地赴任しながら、浜松医科大学皮膚科学講座で戸倉新樹教授のご指導のもと、アトピー性皮膚炎の分野で研究を始めた。アトピー性皮膚炎患者において皮膚バリア機能に欠かすことのできないフィラグリンの遺

伝子異常が報告されたことは、長く解明されていなかった病態が少しずつ解明されるきっかけになった。現在の自身の研究活動がアトピー性皮膚炎の病態解明につながるような仕事になれば、臨床医としても研究者としてもこれ以上の喜びはない。医学生の際は答えが用意された問題ばかりに取り組んでいたが、卒後は答えのない問題ばかりである。Science はどこまでいってもゴールはなく、時に自身の信念や哲学を問われる。いくらか求道的になるが、そこで世界とのつながりを感じながら知的好奇心を満たし、達成感が得られるのはある種の贅沢である。

プロの仕事は道楽と酔狂と表現した作家がいた。道楽とは道を楽しむことか、道を楽しむことか、私にもわからない。ただ、酔狂に走れるような仕事には豊かさを得られる。地域医療とは、医療従事者がその地域住民とともに良い地域社会を築く活動とも定義されるが、広義には医療従事者は皆、地域医療従事者といえる。その中で医師として、単に一人の知的労働者としてではなく、physician-scientist として従事できるのは理想的と考える。時代を問わず、洋の東西を問わず、中庸というのが重要な徳目の一つとされるが、それは地域医療とアカデミアにおいてもあてはまるのではないだろうか。

「平静の心ーオスラー博士講演集」より一部省略して引用

その歳月（卒業後の五年間）の過ごし方いかんで将来が決まり、その後の運勢を占うことができる。その進路はなんであれ、学生生活に関しては卒後の五年間が彼の運命を決める。都会にいて時勢についてゆくのはさほど難しくない。診療所や大学では研究が行われており、医学会からの刺激を受けることもできる。ところが、小さい町や田舎では、よほど意志の強固な人間でないと、退化を起さずに五年間という待機の歳月を過ごすのはきつい。

References

- 1) Kamiya K, Aoyama Y et al.: Br J Dermatol, 167: 252-261, 2012.
- 2) Kamiya K, Aoyama Y et al.: J Dermatol Sci, 70: 190-195, 2013.
- 3) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 日外科系連会誌, 36: 925-929, 2011.
- 4) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 日外科系連会誌, 37: 92-95, 2012.
- 5) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 日外科系連会誌, 37: 130-134, 2012.
- 6) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 地域医学, 26: 228-231, 2012.
- 7) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 日外科系連会誌, 37: 271-274, 2012.
- 8) 神谷浩二, 神谷尚子ほか: 日外科系連会誌, 37: 292-297, 2012.



！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

【発行】自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 学事課大学院係 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>